

## 第Ⅲ編 卷末図集

## <はじめに>

### ■ 最大津波高分布図と浸水予測図を使用する上での注意点

#### 1. 注意点

本浸水予測図は、「対馬海峡東の断層」「周防灘断層群主部」「雲仙地溝南縁東部断層帯と西部断層帯の連動」で地震が発生した場合に、予測される浸水状況を示したものです。

実際にこれらの地震が発生した場合には、潮位や震源の位置などが想定と異なる場合があります。そのため、浸水状況は変わることがあります。

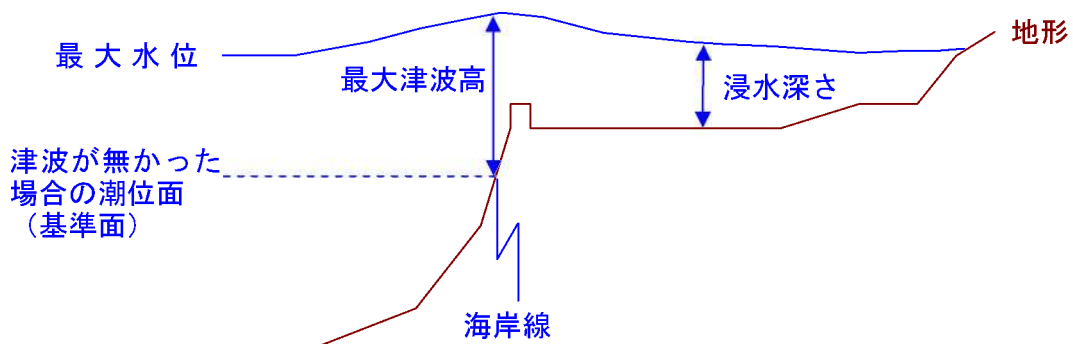
浸水予測は、数値シミュレーションにより行っています。計算条件は次のとおりです。

- ・ 数値シミュレーションは、福岡県全体を 10m 間隔にメッシュ化して行っています。そのため、10m よりも小さい規模の地形的特徴は反映されていません。
- ・ 計算では主要な河川は地形として考慮していますが、その他の中小河川は考慮していません。実際の津波の場合には、そのような中小河川からの流入も考えられますので、注意してください。
- ・ 本計算では海岸堤防や護岸を考慮しており、水門や陸閘は閉じた状態としています。
- ・ 潮位は、県土周辺の沿岸部の観測地点や港の潮位資料を参考として、同じ程度の潮位が観測されている地域をひとつの範囲にまとめ、その範囲毎に潮位を設定しています。

#### 2. 浸水深さについて

浸水深さは、陸地で最も水位が高くなった時の津波の水面の高さを、その場所の地面から測った値です。

なお、最大津波高は、海岸線において最も潮位が高くなった時の水面(最大水位)を、基準面から測った高さです。この基準面は、津波が無かった場合の潮位面としています。



#### 3. 河川や海岸に接したメッシュについて

本浸水予測では 10m メッシュで地形の標高をモデル化して計算を行っています。そのため、河川や海岸に隣接したメッシュでは、陸地に一部入り込んでいた場合であっても、標高が河床や海底面の高さに近いレベルに(陸地よりも低く)設定されている場合があります、その場合は浸水深が大きく表示されています。

■ 浸水深と危険度

浸水深		深さの目安および危険度		
		身体	建物	自動車
0.00～ 0.15m 未満	0.00～ 0.15m 未満	足首までつかる深さ	床下浸水。	0.1m 程度でブレーキが効きにくくなる。
	0.15～ 0.50m 未満	膝までつかる深さ。 0.5m を超えると歩行が困難となる。 さらに流れが(秒速 1m/秒程度)あれば 0.3m 程度でも歩行が困難となる。		0.3m 程度でマフラーから水が逆流して、エンジンに水が浸入。 オートマチック車ではクラッチ板の剥離がおきる。
0.50～ 0.80m 未満	0.50～ 0.80m 未満	膝までつかる深さ。 1983 年の日本海中部地震による津波では浸水深 0.7 m の津波で死者が出ている。	床上浸水。 0.5m 以上 1.0m 未満で木造建物は軽微破壊。	車が浮き、ドアの開閉が難しく、中に閉じ込められて車とともに流出され、危険な状態。
0.80～ 1.20 m 未満	0.80～ 1.20 m 未満	胸までつかる深さ。	床上浸水。 1.0m 以上 2.0m 未満で木造建物は半壊。	
1.20～ 2.00 m 未満	1.20～ 2.00 m 未満	足がつかない深さ。	床上浸水。 2.0m で1階軒下まで浸水する程度。 5.0m で2階軒下まで浸水する程度。 2.0m 以上で木造建物は全壊。	
2.00～ 5.00 m 未満	2.00～ 5.00 m 未満			

<参考文献>

「津波・高潮ハザードマップ作成マニュアル(案)」

津波・高潮ハザードマップ研究会事務局(2003)

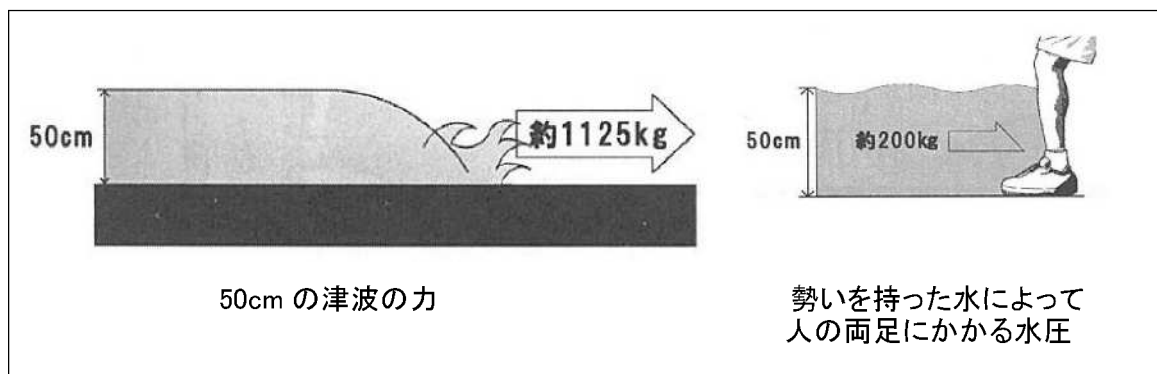
「浸水想定区域図作成マニュアル」国土交通省河川局治水課(2005)

「津波災害予測マニュアル」財団法人日本気象協会(1997)

「利根川の洪水」利根川研究会(1995)

「国土交通省 九州地方整備局 HP」 <http://www.qsr.mlit.go.jp/kozui/main2.htm>

■ 参考図 津波の力



<参考文献>

「津波から生き残る」土木学会(2009)